

## J ヴィレッジからいわきの海岸へ

先月末に49年間の会社勤めを終わりにし、1週間後の7月8日(月)に、日帰りでいわき市方面へ行ってきました。2年前の震災一ヶ月後、4月3日にもいわき市の友人を訪ねて、その海岸線の津波被災状況を目にしていました(注1)。

前は、原発から30kmほど離れた四倉海岸から立入禁止で、警察官が通せんぼうをしていました。今は、10kmあたりまで帰還制限が解除され、その内側も昼間は家の片付けに入ることができるように制限が解除されたと新聞などで報道されています。しかし、政府が大金を投じて除染しても効果が上がらず、地元の人々はおいそれとは帰らないだろうと思っていました。

他方、福島第一の現場は次から次へと発生する問題に、泥縄式に対処していますが、いよいよ汚染水を貯めきれなくなって、海へ漏れ出してきました。

このような現状の中、地元はどうなっているのだろうか、ありのままの空気を感じたいと思い、とりたてて予定を立てないまま、妻・律子とともに行きあたりばつりに参りました。

前々日に梅雨明け宣言があり、前日は関東一円が35~36°Cの猛暑日で、この日も朝からむしむししていました。

朝8時に家を出、1時間ごとに小休止を取り、いわき中央ICに差し掛かったのがちょうど昼の12時。前はここから先は不通でしたが、今回は広野ICまで行けるといふ。ともかく行けるところまで行こうと、そのまま直進しましたが、高速道路が今まで片側2車線だったのが1車線になり、すれ違う車も急に少なくなりました。一般乗用車はほとんどなく、工事用のトラックやワゴン車が目立ちました。

広野ICで降りたら、Jヴィレッジへの矢印があり、それに従って進むと、Jヴィレッジの北側道路へ入りました。駐車場は工事用の人々が置きっぱなしにしている車で止めるどころなく、そのままUターンして出てきました。また、大通りへ出て今度は南側の入口から入りました。現場と行き来するバスや作業用の車両はこちらの門から出入りしているようです。ちょうど昼休み時で、東電の作業着を着た大勢の人々が仮設の食堂で昼食をとっていました。広いサッカーグラウンドには、仮設の宿舎がびっしり建っていました。インターネット情報によると、これらは個室で、東電職員が入っており、下請け作業員は屋内練習場に集団で宿泊しているようです。これから暑い季節に重装備で現場作業にあたる3,000人の人々に「ご苦労さん」という気分でした。

Jヴィレッジは広野町と北側の檜葉町にまたがっており、そこから10km北へ行くと福島第2、さらに10km北へ行くと福島第1があります。Jヴィレッジの東側は、海岸沿いに東

電の広野火力発電所があり、高い煙突が2本遠くからも見えていました。そこから、6号線をゆっくり南下しました。

6号線の街道沿いにポツポツ建っている家は、住人がいるのか空家なのかはっきりとしません。「店を再開しました」という表示を出しているところがたまにあるので、人々がぼちぼち帰っているのだな、と推測しました。道路から海岸の方へ降りる脇道に「広野駅」という標識があるので、狭い駅前商店街へ入ってみると、人通りはないが、その割にタクシーが走り回っていて、Jヴィレッジ経由フクシマ現場へ出入する人が多いことを実感しました。駅前広場へ入ったら、発電所関連で来た3人連れの旅客が迎えに来た作業着姿の人の車に乗り込むところでした。「広野駅に特急列車が止まるよう、乗り降り回数の増加にご協力ください」というポスターがありました。震災前に張り出されたものだったのでしよう。

常磐線と国道6号線が海岸線につかず離れず並行しており、次の駅は末続、その次が久ノ浜でした。時刻は1時になり、久ノ浜の駅前のコンビニでサンドイッチを買って、誰もいない駅の待合室で食べさせてもらいました。常磐線の列車は途中で途切れており、南相馬市までつながっていませんが、それでも1時間に1本くらいは走っていました。ちょうど通りかかった5両ほどの列車に客が各車両1人いるかどうかという感じでした。それからさらに南に降り、「道の駅よつくら港」。津波の1ヶ月後は、屋根付き通路の屋根が地面に落ちていましたが、それらは片付けられて広い空き地になっていました。

そこから、いわき市の市街に向かい、渡辺夫妻の家に立ち寄り2年ぶりに旧交を温めました。

退出してから、いわき市の海岸線の豊間の町へ向かいました。途中の水田は田植えがされて緑の稲が美しく映えていましたが、高久小学校の立派な校舎はがらんどろで、平日というのに人気がありませんでした。このあたりは原発から離れているとは言え、子供連れの人たちは20%ほどしか帰らず、学校が成り立たないのだそうです。

海岸沿いの道路を豊間の町に入ったら、道路脇の豊間中学校もがらんどろで、既に廃校が決まっており（近くの豊間小学校と併合する）、校庭は汚染土の置き場になっていて、重機を使って土を盛り上げていました。その町の長い海岸線が終わったところに富神崎という小山の岬があり、それから2kmほど南に有名な観光名所塩屋崎があります。この間の海岸線にも町があったのですが、津波に洗われていまはひとつの街が完全に更地になっています。炎天下に、海岸の堤防脇に車を止めて打ち寄せる荒い波に向かってひとり合掌している男性がいました。

塩屋崎は美空ひばりの歌で有名になったところで、ひばりの歌を刻んだ石碑が二つもありました。そして、観光バスが2台も止まって、茶店で休憩していました。崖の上の灯台までの道は縄が張ってあって通行止めでした。

そこからさらに2kmほど海岸沿いに下ると合磯岬、その間の海岸堤防沿いの町も更地になっていて、たくさんの家の土台や塀の跡、庭石がありました。

その後、さらに海岸沿いを南下し、小名浜市の三崎公園へ入り、丘の上のマリンタワーに登りました。タワーの天辺は標高 100m あまりで、北は塩屋崎の灯台、南は勿来の海岸まで見渡せました。

その後、小名浜港に沿って市内を通り、勿来の化学工業地帯（かつて、その呉羽化学へ仕事に来ました）を通過して、いわき勿来 IC から高速道路で帰りました。

注 1. 「東日本大震災」『筒井新聞』第 227 号

<https://sites.google.com/site/tsutsuishinbun/227/higashinippon-daishinsai>